地方私立大学の地域貢献

目瀬　守男
（美作大学長）

教育理念と地域貢献

少子高齢化社会、大学全入時代、地域再生等の大きな社会の動きの中で、地域の知の拠点としての地方私立大学の地域貢献のあり方が大きく問われている。その場合に、まず立ち返らなければならないのは、大学の教育理念と地域貢献との関係である。本学は新幹線岡山駅から北へ一時間の距離にあり、元美作国の中心都市、人口一一万人の津山市にあり、小京都と言われ、元来多くの文化、教育面での人材を輩出したところである。ここに大正四年の創立になる美作学園に昭和二六年短期大学、四二年に大学、平成一七年に大学院修士、一九年博士課程が設置された。平成一五年には女子大から男女共学に移行し、大学は大きく飛躍してきている。

さて本学の教育理念・目標は「創造的で自立した人間の育成」「人間性豊かな専門的職業人の育成」と「地域社会の発展・文化の進展に寄与すること」からなっている。すなわち、大学の本来の職能である教育・研究に加えて地域貢献が示されている。

地域振興・活性化における大学の役割

美作地方（三市五町二村）に一つしかない本学に対して地域貢献へのニーズは極めて高い。大学の地域貢献には、主に教員によるものと学生によるものがある。地域社会の貢献へのニーズは、教育・文化・スポーツ、健康・医療・福祉、産業（農・工・商・観光）、都市基盤・環境、まちづくりなどがある。これらの地域ニーズに対して、大学がどのように役割りを果たすことができるか、そこには、おのずから限界がある。

受けて立つ本学には、生活科学部と短期大学部があり、「食と子供と福祉と建築」の分野の少人数教育と研究を行っている。このような学内事情の中で地域貢献をどの分野からスタートさせていくか、結果論ではあるが、本学の場合は平成一一年七月からの美作大学技術交流プラザ（以下美大プラザと略称）の設立であった。この組織は平成八年につやま新産業開発推進機構が津山市に形成され、まず津山高専技術交流プラザが設立されたのち、本学への加入要請が度々あったが、対応したのは筆者が平成一〇年に学長として赴任してからであった。

美大プラザの設立と技術革新

平成一一年七月美大プラザが発足、当初三分科会（繊維・縫製、食品、生活科学）からスタートした。しかし、本当に成果が出始めるには二年余の歳月を必要とした。その後本組織には新たな分科会も設置され、平成一八年一月には本学で四分科会で二三二回の研究会が開かれてきた。開発された商品は三〇数品目に及んだ。特に食品分科会で開発された商品だけで、大きなパーティができるようになった。平成一八年度、美大プラザ開発商品の売上額は約二億円に達した。そして加入各社は、従来の受注・販売指向から開発・販売指向に変わり経営・流通革新が行われている。

一方、美大プラザに関連して、農業分野の改善要望があり、平成一八年二月「津山リーディングアグリクラスター」が設立された。ここでも、地域農業の再編に大学の役割を果たし始めている。

学生による地域貢献と教育

学生による地域貢献には、社会適応力を強めるためと、地域活性化への対応との二つの側面がある。本学では、本格的に取り組むようになったのは平成一八年からであり、学生部に付設しているボランティアセンターが主に推進の役割を担っている。

センターの活動の代表的なものには、(1)福祉施設訪問ボランティア、(2)児童相談所へのメンタルフレンドとしてのボランティア、(3)放課後の学童保育への出向ボランティア、(4)幼稚園や保育所へ出向き、人形劇や絵本の読み聞かせ、ゲームなどの相手としてのボランティア、(5)地域の歴史ボランティアの史的な行事や活性化へ向けたイベント参加、(6)地域の子供たちの各種スポーツ活動への関与等がある。このようなボランティア活動に対応して、インターンシップボランティア、ボランティア論等が開講されている。

また、本学には西日本を中心とした学生が集まり、勉学しているが、各県の県人会が中心となり、市内外の各種イベントなどに参加し、地域活性化に大きな貢献をしている。

さらに、美作地方に一つしかない大学ということもあって、各種の地域連携に係っており、代表的なものとして大学コンソーシアム岡山(岡山県の県内一六大学加入)、コンソーシアム津山の設立準備、高大連携、出前講座、生涯学習としての美作学の開催、一〇年になろうとする歴史を持つ「夢の森児童文化賞」の推進等が行われている。最近では新設された体育館や陸上競技場の、地域への開放、さらに津山市立図書館と本学図書館の相互利用協定等が行われている。

地域生活科学研究所の設立

地域生活科学研究所(以下地生研と略称)の内容は(1)地域のニーズに応えて調査・研究・制作・創作等を受託する(ワーク)。(2)自治体や地域諸団体の委員会・ワーキンググループなどに専門知識・技術を持って参加・協力し、また美大プラザの活動を包含する(コ・ワーク)。(3)設置趣旨に沿ったテーマ設定による研究所独自プロジェクト研究を行うとともに、所員の研究をサポートする(リサーチ)などの目的のために設立された。ここではまた地域貢献に係わる地域生活科学研究助成金が支給されている。平成一八・一九年度については、(1)地域産業(2)教育文化・スポーツ(3)健康・医療・福祉(4)都市・農村基盤(5)防災・環境保全等の分野に及んでいる。研究所以外の大学研究助成金は別途であるが、本学は生活科学の研究分野が中心であるために、教育・文化・スポーツ、健康・医療・福祉、地域産業、防災・環境保全等の研究も多くあり、もちろん、地域に係わらない研究もある。

また、地生研は平成一七年五月に「津山市第四次総合計画」の策定について受託した。この計画策定は、研究所員約三〇名、学外研究者約一〇名の参加によって行われた。この計画策定は、住民参加型のシャトル・サーベイ法によって行われ、小学校区を中心とする二一地区、分野別懇談会、議会委員会、行政各分野等のニーズ把握・ヒヤリングを通して行われた。この計画づくりを中心に四年の歳月をついやして作ったのが美作大学地域生活科学研究所編「平成の大合併と地域社会の再編・活性化」(明文書房、二〇〇七)である。

地域貢献の今後の課題

大学の再編・活性化の中で、本学の地域貢献は大きく展開して来た。そこで地域貢献の今後の課題について指摘しておきたい。

すなわち、地域貢献が今後持続的に発展するためには、「大学の地域に対する貢献に対して、地域社会からの誘因(地域社会が大学を引き付ける力、すなわち経済力・非経済力)が大きいか、または等しくなければ地域貢献が存続することは難しい」。これまでの本学の経験では、貢献に対して誘因が必ずしもバランスのとれたものではなかったと思われる。今後、改めて見直しが必要になる。今後貢献分野で欠けている学生の教育、生涯学習、地域文化の振興等に係る分野について、津山高専、津山市等と連携して包括的に推進していく必要がある。